

平成30年12月12日

石巻市議会議長 木村忠良 殿

産業建設委員会  
委員長 阿部正敏

視察報告書  
視察の概要は下記のとおりです。

記

- 1 参加委員 委員長 阿部正敏  
副委員長 楯石光弘  
委員 大森秀一、星雅俊  
阿部欽一郎、渡辺拓朗  
水澤富士江
- 2 視察日時 平成30年10月23日から  
平成30年10月25日まで 3日間
- 3 視察先及び視察内容  
(1) 岡山県 玉野市 港湾整備と利用促進への取組について  
(2) 香川県 土庄町 瀬戸内国際芸術祭への関わりと観光戦略について
- 4 視察目的 別頁のとおり
- 5 視察概要 別頁のとおり
- 6 所 感 別頁のとおり
- 7 添付書類 別頁のとおり
- 8 経 費 8人 574,733円 (随行職員の旅費を含む)

### ○視察目的

玉野市は、瀬戸内海に面した四国への玄関口として、また、海を活かした臨海工業都市として発展してきたが、地域経済の低迷に加え、人口減少や少子高齢化の進展などの影響により、財政状況は厳しい状況にある。このような変革の時代にあつて、厳しい都市間競争を勝ち抜くため、「市民が誇れる郷土・玉野」の実現に向けて、魅力的なまちづくりの形成、安全安心の確保や道路・港湾等の都市基盤整備の推進等、各施策に取り組んでいる。

特に、港湾整備の取組としては、重点施策提案書の中で、「重要港湾（重点港湾）の整備、利用促進について」を提案事項の一つに掲げ、宇野港の整備・ポートセールスのさらなる推進を図っている。

また、「宇野港港湾計画」に基づき、宇野地区の第一突堤においては大型旅客船埠頭を平成18年5月に供用し、多くの大型旅客船の寄港に向けて取組を進めるとともに、さらには県と連携してクルーズ船の寄港を進めるためにポートセールスを強化する方針を示し、船旅の魅力発信及び宇野港への寄港誘致に努めている。

本市においても、石巻港への大型客船の誘致に向けてさまざまな取組を実施しており、本年は過去最高となる年間6隻の大型客船が寄港する予定となっていることから、石巻港のさらなる利活用の拡大に向けて、先進地の玉野市の取組について学び、本市の事業推進の参考とする。

### ○視察概要

#### 1 玉野市の概要

玉野市は、瀬戸内海のほぼ中央にあり、岡山県の南部に位置し、人口58,769人（2018年4月1日現在）の都市である。

明治39年に宇野港が修築され、明治43年には宇野線の開通と宇高連絡船（宇野市と高松間）が就航、海上交通の基礎が築かれ、連絡船が頻繁に往来する「眠らない街」でした。

産業においては、明治に杉山製鋼所が、大正6年には川村造船所（現三井造船株玉野事業所）が建設され市の基幹産業が形成された、その後、長年にわたり順調に発展してきたが、オイルショックや構造不況、さらには、近年の景気低迷から経済状況は、停滞傾向にあり、現在は、海岸線を生かした滞在型の観光・リゾート開発等の各種プロジェクトを推進し、地域の活力回復に努めている。

#### 2 「宇野港宇野地区」（重要港湾）の整備とポートセールスについて

昭和4年宇野港が第2種重要港湾としてされたことにより、名実ともに岡山県の海の表玄関として発展を続けた。

しかし、宇高連絡船やフェリー航路は、昭和63年の瀬戸大橋の開通、高速道路料金減額により大きな影響を受け旅客の激減のため航路の存続が大きな課題となっている。

現実、以前29分置きに発着していたフェリーは、減便に次ぐ減便で1日5便まで減っている。

現在、県下最大の人流港として、平成18年3月に完成した大型旅客船バースの供用開始に合わせ、平成16年「宇野港航路誘致推進協議会（事務局岡山県・玉野市）」の設立により大型客船誘致のためのポートセールスを進めている。

また、宇野港への賑わい創出、周辺の港や観光とのネットワークの構築による、海に開かれた観光拠点づくりを推進している。

#### ・港湾整備状況

第一突堤 水深—10m岸壁1バース 280m（5万トン級客船が接岸可能）

〃 水深—5m岸壁1バース 120m

第3突堤 水深—10m岸壁1バース 185m

〃 水深—5.5m岸壁1バース 90m

定期航路6航路（往復約86便/日）

#### 年取扱貨物量（2014年）

合計 1,441万t（ピーク 2002年 5,619万t）

輸移出 694万t

輸移入 747万t

\*貨物は、鉱産品、化学工業品、金属機械工業品など

\*石巻港の貨物量 344万t

#### ○大型客船誘致の状況

取扱貨物量の激減もあり、港湾機能の再編が余儀なくされ、ウォーターフロントの再生を目指す、宇野港宇野地区の再編整備計画を策定した。

以後「24時間型の賑わいと潤いある交流型のウォーターフロントの創出」を目指し、宇野港の再開発事業を推進中。

この事業の一環として、3万トン級の大型客船の接岸可能なバースが平成18年3月に完成し、大型客船誘致には、岡山県、宇野市、商工・観光団体による「宇野港航路誘致推進協議会」を設立し、クルーズ客船の寄港や定期的な航路の開設の実現に向け活動している。

#### 「宇野港航路誘致推進協議会」活動状況

##### ○（平成29年度事業報告）

##### 航路誘致推進事業

（1）ポートセールス 旅行代理店等（東京）に事務局員で10回訪問実施

（2）「クルーズせとうち」による活動

神戸、宇野、高松、広島、北九州、別府港の各港が連携を図り、「クルーズせとうち」として共同のポートセールス、セミナーの開催実施

セミナーテーマ：「クルーズこそ、せとうち観光最強の武器である」

(3) 宇野港フォトコンテスト2017開催

(4) 寄港歓迎セレモニー等の開催

記念品グッズ（うちわ、ボールペン）を配布

高校生の見送り演奏、保育園児による歓迎演奏、バルーンリリース

地元飲食店、グッズショップ、ワークショップ、キャンドルライト

船内で剣詩舞、民間団体「UNOICI」うのいちのマルシェ（店、イベントなど）

その他、宇野港のシンポジウム、各種会議、セミナー参加など

(5) 予算 年間180万円程度（岡山県、玉野市 各60万円、など）

## ○平成30年度事業計画

### 航路誘致推進事業

大型船寄港予定 18隻（4, 200t～26, 594t）

（船名） ぱしふいっくびーなす（26, 594t）2回

ロストラル （10, 700t）5回

カレドニアン・スカイ（4, 200t）7回

にっぽん丸 （22, 474t）1回 など

### 玉野市担当者の説明

\* 港湾整備に市の権限はなく、宇野港の整備は一段落。拡張整備予定はない。

\* 宇野港に棧橋整備計画はあるが建設目途は立っていない。

\* ウォーターフロントに温泉「玉の湯」設置で活性化、近隣の国鉄未利用地の活用は課題

\* CCRC（たまのし生涯活躍の街構想）と「健康」をキーワード

\* 寄港船舶数は、最大30船を目標としている。

\* インバウンドは、西欧人が主だが、今までの「見る観光」から「体験観光」に変わってきている。和太鼓は評価は低い。

\* 街の活性化には、レンタルサイクルはあるが今後検討していく。

\* 言葉の課題は、ボディランゲージも好評。

\* 観光ルートの事前把握は困難。約90%は、ツアーバス。

\* スターレジェンド号は、180人中130人が残った。マップは、提供済。

\* 18船の乗船客数は把握していない。

## ○所 感

宇野港は、重要港湾で現在の取扱貨物量が輸移入と輸移出が同じ程度で、合計で本市の3倍以上の量がある。しかし、昭和63年の瀬戸大橋の開通、高速道路無料化により、取扱貨物量が、1,441万tとピーク時（2002年5,619万t）の4分の1に激減し、航路の存続をかけて、ウォーターフロントの再生を目指す開発事業を計画推進。

その中で3万トン級の大型客船の接岸可能なバースが平成18年3月に完成し、大型船誘致協議会を設置し、市民の協力を得ながら様々なソフトイベントで大型船誘致事業を熱心に取り組んでいると感じた。

しかし、多くの乗客は、「街」で楽しめる取り組みが少ないため、近隣の観光地（倉敷市、アートの豊島など）に素通りしており、旅行代理店へのバスツアーコースの積極的な売り込みや全体誘致客船の乗客数や事業効果の把握が弱いのではと感じた。

## ○政策・提言

### ○ポートセールス・職員研修等について

石巻市は、トップセールスで年に2回船社を訪問しているが、担当職員のセールスも必要である。

また、地域の魅力を提案するためにも「地域の魅力ある資源」の研究が必用であり担当職員の研修が必要と思慮する。

なお、寄港情報の地域への周知徹底及び乗船客ニーズの事前把握の検討も必要と思われる。

### ○担当部署について

石巻港大型客船誘致事務は、観光行政そのものである。

現在、「石巻港大型客船誘致協議会」の構成市町は、石巻市、東松島市、女川町、松島町、大崎市であるが、石巻市以外は、すべて「産業・観光部署」で担当しており、石巻市だけが「建設部河川港湾室」である。

昨今の観光行政に求められることは、国内観光はもとより、インバウンド時代に向けた戦略的取り組みである。

そのためには、

- ・魅力的な地域情報の発信（日本らしさなど）
- ・旅行代理店への売込み
- ・地域挙げての受け入れ環境整備 etc

などの充実が必要であり、移り変わりのある観光動向を敏感に把握でき、地域について魅力的企画立案、また、各市町や宮城県、国の観光担当部門、また、観光協会や民間団体と連携がしやすい「観光担当部署」で担当することが効果的と思われる。



産業振興ビルから宇野港を視察



宇野港にて

## 土庄町

# 「瀬戸内国際芸術祭への関わりと観光戦略について」

### ○視察目的

瀬戸内国際芸術祭は、世界がグローバル化・効率化・均質化の流れの中で、島々の人口減少、高齢化の進行、地域の活力の低下が顕著となり、島の固有性は失われつつあったことから、美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内がすべての地域の「希望の海」となることを目指し、2010年から3年ごとに開催されている。この芸術祭は、人々が訪れる“観光”が島の人々の“感幸”となり、島の将来の展望につながって欲しいという海の復権を目的として、12島2港を会場に開催されている。

土庄町においては、小豆島の西部に浮かぶ面積14.5㎢、人口約900人の島、「<sup>てしま</sup>豊島」が本芸術祭の会場の一つとなっており、地下水が豊富なこの島では、古くから稲作や農業が行われ、米、いちご、みかん、レモンやオリーブなどの栽培が盛んな島であるが、現在では、本芸術祭を機に、豊島美術館をはじめとする現代アートが島の各所に展開されており、国内外から多くの方々が訪れる島となり、町の交流人口の拡大にも大きく貢献している。

本市においても、牡鹿半島を中心に、歴史や文化、豊かな自然を舞台に、アート、食、音楽の総合芸術祭であるリボンアートフェスティバルが昨年夏に開催され、交流人口の拡大及び賑わいの創出が図られ、来年も第2回目となる芸術祭が開催される予定となっていることから、土庄町の取組を学ぶことにより、今後の事業推進の参考とする。

### ○視察概要

#### 1 土庄町の概要

土庄町は、小豆島の西北部及び豊島等を含めた地域を含めた地域を行政区域都市小豆島の東南部は小豆島町と境を接している。人口13,369人（平成30年4月1日現在）高齢化率40.4%。瀬戸内式気候で、年間平均気温16度、また、多くの天然良港を作り出している。

#### 2 小豆島観光の歴史について

##### 小豆島観光の歴史概略

小豆島への観光客の入込数のピークは、1973年、昭和48年。観光客数154万人であった。小豆島の観光の大きな話題として、1954年、昭和29年の映画「二十四の瞳」劇場公開とそれを記念として昭和31年に平和の群像が完成。

昭和30年代後半から40年代（1960年代～1970年代頃）には小豆島内の港湾、道路といった、いわゆるインフラ整備が進み、同時に「銚子溪お猿の国」「孔雀園」「寒霞溪ロープウェイ」などの観光施設の整備、ホテルの整備が急速に進められた。

このような時代背景の中で、1972年、昭和47年、新幹線が岡山まで開通した翌年の48年に過去最高の観光客入込数（154万人）を記録している。

翌年、昭和49年にはオイルショックに加え、集中豪雨の被害、また昭和51年の台風17号の被害などが相次ぎ、観光客の数が激減した。

その後、昭和50年代に日本経済は安定成長期に入る。観光客の数も多少増減はあるものの、約120万人から130万人で横ばい。

1985年、昭和60年、ちょうど鳴門大橋が開通した頃から平成2年頃にかけて、いわゆるバブル経済の時期を迎える。昭和63年の瀬戸大橋開通の翌年、平成元年には観光客が138万6千人と第2のピークとなった。

ここ数年の状況として、エンジェルロードには推定、年間約20万人以上の人を訪れる中、3年に一度開催する瀬戸内国際芸術祭をはじめ、昨今の小豆島に関する各種メディアへの登場など、比較的明るい話題が多いと思うが、地域間競争、それも海外の観光地も含めた広域的な競争が激化する中で、平成29年の観光客数は109万4千人であった。ピーク時の昭和48年と比較して約29%減、平成元年の約21%減という状況である。

また、近年は台湾をはじめ、中国、香港、韓国等から多くの方が訪れている。今後も土庄町では「歴史と文化・アートのまち とのしょう」をテーマに掲げ、常にイノベーションを意識した観光施策を展開していくとのことである。

### 3 観光客の動向を左右するのは

- ①国民の所得水準の上昇とそれによる生活のゆとり。基本的には経済の成長。
- ②港湾、新幹線や高速道路網の整備など交通インフラの充実。
- ③イベントによる集客効果。

### 4 3年に一度開催される瀬戸内国際芸術祭について

瀬戸内国際芸術祭は2010年を第1回として、2016年まで過去3回開催されている。（資料として瀬戸内国際芸術祭2016のパンフレットを添付。）

芸術祭は「海の復権」をテーマとして瀬戸内海の12の島々と2つの港（高松港、宇野港）周辺を舞台に会期を春、夏、秋の3つに分けて開催されるイベントである。

アートせとうち2017のパンフレットについては瀬戸内国際芸術祭2016の後も、引き続き、香川、岡山の瀬戸内の各島々で観光振興のためにアート作品を活用している。

ちなみに、次回、4回目の瀬戸内国際芸術祭2019は来年、2019年4月26日から11月4日までの間、春、夏、秋に分けて開催を予定している。

実際に運営する組織としては、香川県を中心とする、瀬戸内国際芸術祭実行委員会を中心に運営されている。その中の参加市町の一つが土庄町である。

#### 【土庄町の取り組みについて】

（香川県内5市4町+岡山県玉野市）

昨年、2017年は瀬戸内国際芸術祭2016の翌年ということで小豆島を訪れる観光客数については若干心配されたようだが、最終的に観光客数は約109万4千人

で、その前の瀬戸内国際芸術祭2013と比較すると約3.9パーセントの増となった。

前回、2016年の瀬戸内国際芸術祭の後、豊島では17作品、小豆島土庄では6作品、小豆島内全体では23のアート作品が芸術祭会期終了後も残り、それらは貴重な観光資源として活用されている。

アートノショーターミナルについては、土庄港のアートノショーターミナルの1階フロアではデザイナーのコシノジュンコ氏とクリエイティブ集団アトリエオモヤのコラボ作品。2階フロアもギャラリーとして展開し、季節ごとに模様替えしながら写真、ファッション、絵画展等を展開している。

小豆島、豊島は2010年の第1回の瀬戸内国際芸術祭から参加している。会期が進むにつれて作品数は増え作品展開の場所も広がっているとのことであった。

前回の瀬戸内国際芸術祭2016では知名度のあるコシノジュンコ氏に芸術祭へ関わっていただいたという点と、土庄町の大部地区において世界的に有名な台湾の芸術家リン・シュンロンさんの「国境を越えて・潮」という作品ができたという2点において特に大きな話題になったそうである。

アートノショーターミナルについては、土庄町では昨今の少子化に伴い約10年前から小学校の統廃合が進められ、使われなくなった公共施設の利活用が課題となっていた。その中でも、一部に空きスペースができる状況になっていた土庄港のフェリーターミナルを、観光の拠点になるようにリノベーションできないかということを検討されていた。

一方、時を同じくして、ファッションデザイナーのコシノジュンコ氏は、知人がいる小豆島を度々訪れており、その際に「小豆島のために力になれることがあれば」という想いを持っているという事をお聞きしたとのことであった。その時に、これを千載一遇の好機であると考え、町の方から香川県の瀬戸芸実行委員会に相談した上で、この縁をきっかけに、瀬戸内国際芸術祭2016への参加に向けた協議が始まったそうである。

その後、平成26年に、コシノ氏から土庄港のフェリーターミナルをリノベーションする作品の提案をいただき、平成27年10月に参加が決定した経緯があったとのことである。

コシノ氏においては単にアート作品に関わったという事だけではなく、夏会期前に地元の小学生を相手に作品制作のワークショップを開催していただいたとのことであった。（資料として当日の新聞記事を添付。）

子どもたちは世界的なアーティストと交流しながら、カタツムリに見立てた画用紙に夢やメッセージを描き、アートの楽しさを肌で感じるとる貴重な体験をすることができ、以前から国の観光大使でもあるコシノ氏自身に小豆島のためにご協力いただいているという点においては、土庄町としても本当に感謝されていた。

また、2016年から瀬戸芸の作品展開地域になった小豆島北部地域の大部地区においては、地元の地区協議会が中心となって大勢の方が2つの作品制作等に関わっていた。「国境を越えて・潮」（資料として新聞記事を添付。）

作品制作には台湾からもスタッフとして15人の方が来ていた。当然、アーティスト、制作スタッフが外国人ということもあり、根本的なものの考え方が若干違う中、



作品制作過程においては、色々な問題も発生した。その都度、行政側も含めアーティスト、台湾のスタッフ、地元のボランティア、皆で一緒に悩みつつ 一步一步解決していった。

特に「国境を越えて・潮」については、作品の話題性も含め、最終的に前回の瀬戸内国際芸術祭2016を代表するようなすばらしい作品になったことは記憶に残るところとなった。

小豆島では小豆島町中山の竹の作品、肥土山のわらアート等をはじめ、多くの作品は地域住民の主体的な取組み、協力があってこそ作品を完成する事ができたことは言うまでもなかった。そのような動きは間違いなく各地域において地域の活性化につながっていると考えている。

参考資料として、瀬戸内国際芸術祭の2016の各島の来場者数と日本銀行がまとめた瀬戸内国際芸術祭2016開催に伴う経済波及効果の資料を頂いた。

#### 5 瀬戸内国際芸術祭の関連企画について

近年、土庄町では瀬戸内国際芸術祭の関連企画として「歴史と文化・アートのまちとのしょう」をテーマに掲げ、石の絵手紙ロードをはじめ数々のオリジナルイベントを実施し、小豆島の魅力を発信している。資料は2013年と2016年のもの。

中でも小豆島石の絵手紙ロード整備事業については、土庄町内において平成24年から整備が始まり、現在47基になった。絵手紙ファンの裾野は広く、全国から絵手紙の鑑賞に訪れている。今後も事業を継続し、さらなる観光名所としての強化を図っていくとのことであった。(資料として「小豆島石の絵手紙ロード」マップを添付。)

#### 6 昨年度から実施している主な事業（日本一どでかぼちゃ大会）概要について

日本一どでかぼちゃ大会の永久公認地に認定されている小豆島。「作る楽しさ、育つ喜びを」という趣旨と共に、平成29年度からJC小豆島青年会議所にかわり土庄町が大会を引き継ぐことになった。今年も9月16日 全国からやってきた49個の大きなカボチャと共に、町の賑わいを世界に向けて発信した。

#### 7 小豆島クルーズウォッチングについて

ギネスブックにも登録されている「世界一狭い海峡から見る小豆島！」である。庁舎の前が土渕海峡の一部となっている。昨年夏、土渕海峡が「海峡」であるということを見ていただくクルージングイベントを始めて実施した。ガイドと共に土庄港～土渕海峡～エンジェルロード周辺をクルージングし、多くの方が乗船された。

#### 8 アートと暮らす「アートベンチ」の制作について

小豆島の間伐材を使い、実用的でありながらアート性の高い作品を制作することで、新たな観光名所として「アートのまち とのしょう」をアピールしている。

また、ベンチは展望台や休憩所となり、島民同士や観光客とのコミュニケーションの場ともなり、にぎやかな町づくりを目指し、昨年は町内に3個のアートベンチが完成している。

## 9 今後の取組について

土庄町では今後も、3年に一度の瀬戸内国際芸術祭も含め、瀬戸内海タートルフルマラソン全国大会をはじめ、さまざまなイベントを企画し、小豆島の魅力を発信していく予定である。

## ○所 感

- ①福武財団(ベネッセ)がプロデュース、主催者会長に香川県知事が入っているなど、財政的に安定しているのではないかな。
- ②あまり広すぎない範囲に作品がおかれ「アートのまち」の雰囲気を出している。
- ③このテーマとは直接は関係ないが、毎年150人もの方が移住されて来るという話に大変驚いた。
- ④メディアに出してもらったおかげで、ロケ地にもなっているとのこと。
- ⑤インバウンドは、台湾、韓国、中国が多いとのこと。

## ○政策・提言

- ①祭りの最中は、町の職員、ボランティアの他にハローワークで募集し、各作品のところへ配置しているとのこと。当市も職員の負担を減らすよう工夫すべき。
- ②知名度の高いアーティストの作品を出して頂き、恒久的に設置できるようにできればよい。
- ③「石の絵手紙」を当市からとれる石を活用、全国から絵手紙を募集して、観光名所をつくり、観光客の呼び込みを強化してはいかがか。
- ④全国的にこのような芸術祭が、各地で行われている。多くの人に来てもらうには食べる所、泊まる所が充分必要である。そのことにより、地域経済への大きな経済波及効果をもたらし、ひいては、移住にまで結びつく事業となると思われる。
- ⑤リボンアートフェスティバル実行委員会全体としても、当市としても財政をもう少し負担すべき。
- ⑥金華山、網地島、田代島などの離島を含めた事業展開及びそれに伴う環境整備も必要であると思われる。

尚、石巻市のリボンアートフェスティバルに関する資料として、下記資料を添付する。

- ①産業推進課（市負担金・実行委員会）
- ②(株)日本政策投資銀行（経済波及効果）



土庄港にて



土庄町庁舎前にて

---

---

お問い合わせ

石巻市議会事務局 議事グループ  
〒986-8501 宮城県石巻市穀町 14 番 1 号  
Tel : 0225-95-5080 (議会直通)  
Fax : 0225-96-2274  
Mail : [assesc@city.ishinomaki.lg.jp](mailto:assesc@city.ishinomaki.lg.jp)